

平成29年2月4日

南の風 220

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

219号で紹介した『ペイントの3対2』は、お奨めのドリルです。

このドリルを小中連携のドリルとして、取り入れている地域が全国にいくつかあります。(ミニバスや中学の部活で必ず指導する内容) 横浜でもぜひこういった、小中が共通して取り組むスキル、ドリルをつくっていただきたいと思います。小中高連携については、ここでは深く触れません。次の機会にします。

オールジャパン皇后杯について書きます。

結果から言うと、JXが強すぎた感じでした。全く危なげがない優勝でした。4連覇を成し遂げました。まあWJBLのリーグでも、レギュラーシーズンは22勝0敗という断トツな強さでしたから順当と言えば順当、鉄板と言えば鉄板と言うことでしょうか。

決勝のJX対富士通戦を、感想を交えながら、分析をして見ます。(ミニや中学にも通じます)

まずは1Pの立ち上がりジャンプボールを制したJXは、10番渡嘉敷、21番間宮を片側のハイポスト、ミドルポストに置き、52番宮澤を逆サイドからカットさせた。(間宮をスクリーナーとしてつかう) ボールを保持していた0番吉田は、宮澤にはパスを入れずに、アイソレイト気味になった11番岡本にパスする。岡本はウィークサイドカットインを試みる。吉田のパスが光る。岡本のショットは外れるが、入りのプレイとしては上々である。富士通の入りは、12番の篠原以外を外へ出し4アウト1インの形で攻める。10番町田の0番長岡へのパスからのエントリーから始める。長岡と11番篠崎のドリブルスクリーンに、ハイポストの篠原がフロントスクリーンを絡める。その際に15番山本が長岡のディフェンスにバックスクリーンを掛ける。篠崎からポップアウトした山本にパスがわたる。それに合わせて篠原がローポストでポジションを取る。山本からパスを受けた篠原が左手のターンフックショットを決める。フォーメーションプレイで2点先取する。得点の後富士通は2-3のゾーンを敷く。インサイドを固め、渡嘉敷、間宮を封じ込めようにする意図がうかがえる。JXは渡嘉敷を外に出し、右(リングに向かって)エルボーからジャンプショットを放つ。外れるが間宮がすかさずリバウンドに跳び、ゴールを決める。間宮はこのオールジャパンでも、『オフENSURIBOUND』という基本的なプレイを当たり前のようにこなしている。JXは相手のゾーンに対して、吉田、宮澤の3ポイント、渡嘉敷のローポストへの跳び込みで攻めるがショットの安定感がまだない。富士通は、長岡の3ポイントが決まりリードする。しかし、JXもすかさず宮澤が3ポイントを入れ返し流れをわたさない。

富士通の長岡は、リオ五輪の後、中のプレイ(ポストでの1on1のステップワーク)と3ポイントに一層磨きがかかっている。このオールジャパンの準決勝、シャンソン戦でも29点を挙げ大車輪の活躍であった。一方JXの宮澤はリオ五輪に選出されるが、さしたる活躍もなく、周りから「なんで、あの人が選ばれたの」というバッシングも受けたという。その悔しさからか、今シーズンはWJBLのレギュラーシーズンの得点平均14.5点、特に3ポイント(ワンハンド)に長足の進歩の跡が見られる。圧巻は、オールジャパン準々決勝のアイシン戦で見せた3ポイント8/11、確率7割というすさまじさである。意を決して取り組んだ努力の後の後が伝わってくる活躍である。